

審査の結果の要旨

氏名 張 瑤

岩井俊二(1963-)は映画監督・小説家等として多様な才能に溢れた総合的なアーティストであり、1990年代以後の中国文化界に大きな影響を与えている。本論文第一章は中国語圏における岩井俊二の映画『Love Letter』小説『ラヴレター』(共に1995、中国語訳『情書』)の受容状況を考察し、中国大陸の作家が同作を受容し独自の創作活動を深め、第6世代監督が『情書』酷似人物」を表象していく過程を論じた。第二章は村上春樹(1949-)『ノルウェイの森』(1987)の影響を受けた岩井『ラヴレター』が、70年代生まれの作家安妮寶貝(1974-、2014年筆名を慶山に変更)の長篇小説『蓮花』(2006)に与えた影響に注目し、高度経済成長期以降の日中両国文化における記憶の形態と「記憶喪失」及びその修復というテーマを考察して、三作間の多元的影響関係を明らかにした。

80年代生まれの郭敬明(1983-)は出版界・芸能界・会社経営と多領域にわたり活躍する現代中国青春文学を代表する作家であり、第三章は彼の長篇小説『悲しみは逆流して河になる』(2007)における岩井作品『リリイ・シュシュのすべて』(2001)の受容に注目し、両作が描く学校でのいじめ等を、宗教学者エリアーデのイニシエーション理論を援用しつつ比較検討した。第四章は安妮寶貝の短篇小説「七月與安生」(2016)の映画化とその過程における岩井受容に着目し、フロイトのエディプス・コンプレックス理論を援用しつつ、作中人物の両女性とその男性友人のイメージ及び三角関係の中の権力構造を分析し、映画化過程において浮上した女性の視覚的快楽、母親の言説、女性主体の構築という諸テーマの展開及び岩井映画『花とアリス』(2004)の少女共犯のテーマの受容について考察した。

第五章は岩井小説『ウォーレスの人魚』(1997)が人魚という表象を通して描いた植民地香港の歴史とその「中国回帰」について分析し、97年中国返還前後における香港監督による映画、羅文(1945-2002)『人魚傳説』(1994)及び周星馳(1962-)『人魚姫』(2016)にも注目し、日本と香港の監督が描く人魚と香港の関係性及び香港人魚の系譜的關係を検討した。第六章は賈樟柯(1970-)映画『山河ノスタルジア』(2015)と岩井映画『スワロウテイル』(1996)における近未来都市・金銭・ノスタルジアの表現に焦点をあて比較研究した。

本論文は『Love Letter』が中国において作家を輩出させ、彼らが文化界の中堅に成長した後に岩井とコラボレートしてさらに新たな東アジア文化を創作している点及び岩井作品と中国の歴史社会文化との関連性を論証して、現代日中両国文化の密接な連動性を批評的にして可視的に描き出すという顕著な成果をあげている。映像分析の不足等の課題を残すものの、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。